

2023年度

SA

小論文

3月12日(日)

人文社会科学部 (社会学科)

10:00~11:30

【後期日程】

注意事項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(3枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は、3ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙(1枚(表裏))を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については、下記の点に留意すること。

- ・書き出しは、一マスあけない。
- ・改行したら、最初の一マスをあける。
- ・句読点は、それぞれ一マス使う。行の末尾については文字と同じ一マスに含める。
- ・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」はそれぞれ一マスで使う。
- ・英数字は一マスに2文字入れてよい。

- 6 問題は、声を出して読んではいけません。
- 7 配点は、比率(%)で表示してあります。

試験終了後

- 8 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

私たち人間が生きる社会や経済の、「成長、拡大」か「定常」かをめぐる議論は、ある意味で「古くて新しい」という形容がもつともふさわしいテーマの一つである。現在の日本では、たとえばそれは少子化という現象や人口減少社会の到来という話題との関連を含めて既に活発に論じられている。また、「成長」という価値そのものを地球レベルの視座で根本から問いなおした議論の系譜として、現在に連なるものとしてさしあたり想起されるのは、ローマ・クラブが一九七二年に発表した『成長の限界』であるだろう。

一方、私たちが現在直面している「成長」問題の起源をなすといえる産業化ないし工業化という現象に視点を向ければ、そうした産業化の動きが加速し本格的に展開していく分水嶺の時代といえる一九世紀半ばにおいて、ジョン・ステュアート・ミルは古典派経済学の決算とされる著作の中で独自の「定常状態」論を既に提起していた。ミルは言う。

「私は、資本と富の定常状態を、保守的な政治経済学者たちの多くが示すようなあからさまな嫌悪感を持つて見ることはできない。むしろそうした状態は、総じて、現在の状況を大きく改善するものだと考えたい。実を言うと私は、先へ先へと進もうとして苦闘することが人間の常態であり、互いを踏みにじり、ぶつかり合い、押し退け、足を踏みつけあうことが人類の最も望ましい天性であると考えている人たちが提唱する生活の理想というものに、魅力を感じていない。資本と人口の定常状態が、人類の向上の停止を意味するものでないことは、ほとんど言うまでもないだろう。」

(ジョン・ステュアート・ミル『経済学原理』)

しかしながら、ミルのような議論はやがて、当時「成長」に対する最終的な規定要因と考えられていた土地や食料の制約を越える形で産業化(や植民地からの収奪)が展開していく中で、以後の新古典派の経済学では忘れられていくことになる(こうした経緯については広井(二〇〇二)第4章参照)。

そして、さらに視野を大きく拡大すれば、私たちの生きる地球が、太陽や宇宙空間との間で光や熱エネルギーをやりとりしつつ、水と大気の循環を通じて一定の均衡状態を保っているという「開放定常系」の議論があり(室田「一九七九」、槌田「一九八二」)、その先には、宇宙そのものの定常性や進化に関する探究や考察の系譜が存在している。

このように「成長、拡大」と「定常」をめぐる議論には様々な位相や局面が存在するが、現在の私たちにとって比較的親しく、また具体的なイメージを持ちやすいのは、地球資源の有限性や人口のゆくえに関するものであるかもしれない。

問題の輪郭を把握するために一例を挙げると、先に挙げた『成長の限界』の主要な著者であったドネラ・H・メドウズらは、同書において「ワールド3」と呼ばれるモデルに基づいて行った地球の未来(人口、食糧、工業生産、環境汚染、生活の豊かさ等)に関するシミュレーションを、同書が出版されて三十年が経過したことを機にあらためて行い、二〇〇四年に公表している(メドウズ他「二〇〇五」)。それによれば、人間が現在と同じような経済活動を続けると、主に再生不能な資源のコストの急騰から二〇三〇年頃にある種の破局が訪れる。それを回避するために、

(a) 技術……汚染除去・土地収穫率・土地浸食軽減及び資源利用に関する技術進歩

(b) 人口……人口増加の抑制(二〇〇二年からすべての夫婦の子どもの数を二人以内に制限すると仮定)

(c) 消費……一人当たりの工業生産を二〇〇〇年の世界平均より約一〇%高めに設定(＝発展途上国にとっては相当な改善、先進諸国にとっては消費パターン)の大きな変化)

という三つの面での対応を行った場合、はじめて地球は二十一世紀後半にある種の均衡状態に達し、世界人口は八〇億人弱で安定し、以降一人当たりの資源消費や生活の豊かさも安定する、とのシミュレーション内容となっている(この議論の枠組み自体は『成長の限界』の初版、及び一九九二年に出された第二版といえる『限界を超えて(Beyond the Limits)』と同様のものである。ちなみに国連の人口推計では、二二〇〇年の世界人口は高位推計で約一四〇億、中位推計で約九〇億、低位推計で約六〇億弱となっている[United Nations「二〇〇三」]。メドウズらの推計に比べ資源的制約等が重視されていないものと思われる)。

このようなシミュレーションや議論の枠組み設定は、著者ら自身が強調しているように多くの単純化や条件設定に基づくものであり、様々な留保をもって受け止められるべきものであるが、私たちの認識や行動のベースとなる、世界や地球の現状と将来についての太い線での素描を得るにあたっては、貴重な試みと考えられるべきである。

けれども同時に、こうしたシミュレーションは、それが人間の経済活動や資源消費の「総量」を問題にしているのみであり、その「分配」の問題を射程の外に置いておけるという点で、基本的な限界をもっている。

つまり、かりに人間の社会あるいは地球が「定常状態」に達し、資源消費や環境汚染等の面において持続可能なものになったとしても、そこにおいて大きな富の偏在や貧富の格差が生じていたり、あるいは個々人の生活の質が保障されていないとすれば、おそらくそれは望ましい地球や人間社会の姿とはいえないだろう。すなわち、資源消費や経済活動の定常性ないし持続可能性のみならず、同時にそこでの「分配」のあり方やその公正が問われなければならない

い。ちなみに同書の著者自身も、「忘れてはならないのは、ワールドでは、世界の豊かな地域と貧しい地域を区別していないということだ。飢餓や資源不足、汚染などのシグナルはすべて、全体としての世界に届き、同じく全体としての世界がその対処能力によって反応すると仮定されている。この単純化によって、モデルはきわめて楽観的なものになっている。「現実の世界」では、飢餓は主にアフリカで起こり、汚染の危機は主に中央ヨーロッパに生じ、土壌劣化が進むのは主に熱帯地方であったりする。」と述べている(メドウズ他「二〇〇五」、二八一ページ)。

(広井 良典『持続可能な福祉社会——もうひとつの日本』の構想』ちくま新書、二〇〇六年刊より)

(注) 「古典派経済学」とは、一八世紀後半から一九世紀初頭にかけて、アダム・スミスやジョン・ステュアート・ミルらを中心にして成立したイギリスの経済学派のことを言う。「新古典派の経済学」とは、一八七〇年代以降に形成された近代経済学の立場の総称。

問一 メドウズらが実施したシミュレーション(二〇〇四年に公表されたもの)の結果、どのようなことが導き出されたか。二〇〇字以内で要約しなさい。(配点四〇%)

問二 傍線部について、具体的にどのような取り組みが考えられるか。本文の内容を踏まえながら、あなたの考えを六〇〇字以内で述べなさい。(配点六〇%)

採点・評価基準(具体的基準)

教科・科目名	小論文(後期日程試験:令和5年度)	問題番号	SA
対象学部・学科(課程)等	人文社会科学部(社会学科)		
出題のねらい	<p>課題文は、人間が生きる社会や経済が今後「成長、拡大」すべきか、それとも「定常」を目指すか、という議論を、19世紀にまでさかのぼって検討したものである。また、21世紀初頭にメドウズらによって実施されたシミュレーションの結果にもとづき、今後は「定常」、すなわち持続可能性の追求に力を注ぐべきことを説いている。さらに、「定常」的な状態のなかにも不平等な状況が存在することについても警鐘を鳴らしている。本試験では、こうした議論の論理展開を、順を追って正しく理解する読解力と、それにもとづき自分の考えを論理的に示す表現力を問うことをねらいとする。</p> <p>問1では、メドウズらが実施したシミュレーション結果から導き出される未来予測の深刻さ、およびそれを打開するための具体的な方法について、本書の内容に即して要約・説明する力を問う。</p> <p>問2では、全体として持続可能な状況にあるなかにおける個々への公正な「分配」のあり方について、著者の議論を咀嚼する力に加え、自分の考えを展開するための文章構成力と表現力を問う。</p>		
採点基準	<p>問1 配点40%(80点)</p> <p>① (1)人間が現在と同じような経済活動を続けていると2030年頃に破局を迎えること、さらに(2)汚染除去などの技術の進歩、人口増加の抑制、一人当たりの工業生産力の増加などがあれば、地球は21世紀後半にある種の均衡状態に達する、という点を含んでいること。</p> <p>② 文章全体に論理的整合性があること。</p> <p>③ 誤字、脱字、文法上の誤りがないこと。</p> <p>問2 配点60%(120点)</p> <p>① 資源消費や経済活動の定常性ないし持続可能性のみならず、同時にそこでの「分配」のあり方やその公正が問われなければならない、という筆者の主張を踏まえた上で、自分なりの視点から論を展開していること。</p> <p>② 論点が明確であること。</p> <p>③ 論述の説得性があること。</p> <p>④ 文章全体に論理的整合性があること。</p> <p>⑤ 誤字、脱字、文法上の誤りがないこと。</p>		